ひょっこりひょうたん塾通信

Tatsutto vol.1

撮影場所　浪板海岸

「人」が地域をつくる場を魅せていきたい

FLOWER DRESS 兼澤悟さん（26歳）

アパレル業界から農業に転身し、お客様の喜ぶ顔を思いながら、農業に精を出す青年に会うことができた。ピアス、そしてネックレス。Tシャツにジーンズ。一見、農作業をしているとは思えない。話してみると、「農業」に向き合い、そして、新しいものを取り入れながら、「農業が憧れの職業の一つになるように。若者の将来の選択肢の一つになるように」と目標に向かっていた。

広い敷地では、トルコキキョウ・スターチス・ユリなどの花が咲き、また、シイタケ栽培も行われている。作業をしながら話す兼澤さんの笑顔は「本物」だった。

兼澤さんのハウスでは、「かわいい」テイストのお花を育てている。「女性に『かわいい』と言ってもらうと、うれしい。女性が農業にとりかかりやすいのは、花の分野だと思う。女の子たちの将来の選択肢のひとつになってほしい」と語ってくれた。出荷は、毎朝5時に出て、山田・大槌・釜石地域へと配達する。花が咲き始めれば、朝起きるのもつらくない（笑）」笑いながら話してくれた。「お客様の手に渡るものは、確実に咲かせてあげたい。確実に咲くものを選定して出荷する。定植してから3～4か月。自分たちが育てたお花をほしいという人に・・・だから、（お客様を）飽きさせることはできない」力強く語り、花たちを、愛情深く育てている。

もうひとつ案内してくれたシイタケ栽培の場所。現在、日本のシイタケのほとんどは、菌床栽培と言われている。兼澤さんが育てているのは「原木シイタケ」。体力的にもきついため、男性の仕事となっている。「金沢で自伐した木に菌をつけていく。素手で触ってわかることが多いため、男性スタッフが中心。原木シイタケは『職人』の仕事。原木シイタケを残したい。シイタケを育てている人に、頑固者が多い（笑）」と兼澤さんは話す。仕事にプライドを持っていることが、この場所に来て、よくわかった。人と自然の融合が、こんなにも美しく、そして力強いものだと、はじめて感じている。

農業に転身した兼澤さんは「農業が若者にも受け入れられやすいものになるようにしたい」と話す。

「ここで働いている人のようになりたいと思われるようにしたい。物というよりも、人。あんな風になりたい。働いてみたいと思ってもらいたい。若者が働ける環境を作りたい。今どきの子が、働ける環境を作ってあげて、そういう子たちが入れる準備をしたい。急いではいないが、いずれはそうしたい。花とアパレルのコラボもやってみたい。アパレルでやってきた知識を少しずつ出しながら、やっていきたい。関東や関西に憧れの職業があるから行きたいではなくて、大槌の若者を見て、地域がすごいのではなく、その人がいるから、地域がすごくなるっていうものを中高生に感じてもらいたい。大槌町に、そういうものがいっぱいあってほしい」こんなにも熱い思いを持ちながら、目標に向かっている若者が、大槌にいる。

（文　一兜育恵）

FLOWER DRESS

〒028-1133
大槌町金沢28の4
TEL 0193-46-2135
flower dress@rouge.plala.or.jp

もっと釣りを楽しむ人を増やしたい

御箱崎釣具店　大羽美年さん（25歳）

小学生の頃、船に乗せられ船酔いし、二度と乗らないと思った、という大羽さん。小学校から高校まで、ずっと野球に打ち込んだ少年時代だった。今では「もっと釣り人口が増えてくれたら」「いつかは釣り大会やバーベキューしながら釣り、という企画もしたい」と目を輝かせる。

高校を卒業して関東に出た。父親は、釣具屋を継げ、とは言わなかった。初めての仕事はスーパー勤務。時間的に余裕がなく、体調を崩したのはここに勤めていたとき。「今思えば、あのときの経験が糧になっています」と大羽さんは振り返る。

スーパーを辞めて、得意の運動を活かすインストラクターに転職。そんな最中の21歳の時震災が起こった。その時は飲食店でラーメンを食べていた。その日、家に電話したがつながらない。テレビを見ても大槌の情報は流れなかった。初めて大槌の状態を知ったのは4、5日後、自衛隊の空撮だった。「頭の中が真っ白になりました。親が心配というより、どうしたらいいんだろう、という感じで。現実味がありませんでした」

それからほどなく、関東に住む同級生の車で大槌に帰ってきた。家は壊れていたものの、家族は無事だった。「いつかは帰ってくるつもりだったけど、タイミングはここだな、と思いました。店を再開する、と親から聞いて。そして親に店を継ぐ話をしました」しかし、勤務先にその旨を告げると、代わりの人が入るまで待ってくれ、と言われ正式に大槌に帰ってくるのはそれから2年後の秋のことになる。高校を卒業し、5年半関東にいて、インストラクターの仕事も充実し、地元の友達とも交流があった。「十分遊んだな、と思いました（笑）」

帰ってきた当時は海が嫌いだったという。ずっと野球でバッテリーを組んできた同級生が亡くなったからだ。店を始めたお盆に同級生の夢をみた。

大槌に帰ってきた時はすでに店は再開されていた。船は小さいものが一隻。初めのうちは、震災があったのに釣りなんて、という声も聞こえてきた。「友だちを奪った海だし続けられるかな、と思ったこともありました。しかし、お客さんからの『釣りブームを盛り上げて行こう』という声、そして自営業の友人たちとがんばろうと励まし合って続けられました」

現在は大きな船も購入し、それは店主であるお父さんが運転、大羽さんは小さい船を任されている。「昔とは釣りの仕方が変わってきています。えさではなく、ルアーで釣る。そしてGPSをつけてポイントへ向かいます。父がしっかりしていて、教わることも多いので、のびのびと仕事が出来る環境はいいと思う」船の操作、魚のいるポイントなどお客様から教わることも多いという。

「大槌が好きとか嫌いとかそういうのは考えたことがありません。商売をやってみたい、と思っていました。今はこの仕事でやっていく、とはっきり決めたのでアイディアを出すのが楽しいし、やりがいがあります」

岸壁に繋がる船の上で、はにかみながらもプライドを持った背筋の伸びた後ろ姿が印象的だった。

（文　駒林奈穂子）

御箱崎釣具店
（美嘉丸）

〒028-1131
大槌町大槌 16-34-8
TEL 0193-42-6212

2010年8月6日撮影　／撮影　Hana Ozawa

青い空に、青い海。海に浮かぶ、笑顔のサーファー。以前よりは減ってしまったけれど、頑張ってそこに居てくれた、松林。再開したホテル。大槌町浪板の見慣れた景色に、少しだけ違和感があるのは、なぜだろう。そうか。砂浜か。あって当たり前と思っている砂浜が、今は姿を消している。

海岸に下りてみると、コロコロと石たちが音を立てながら、波とともに行ったり来たりしている。砂浜は、今は、まだない。再生を心待ちにしている声は、少なくない。

海での思い出には、必ず砂浜は付き物。

小さい頃に来ていた浪板海岸は、砂浜があって、そこにシートを広げて、海で遊んだ。穴を掘って、誰かが埋まってみたりする。ふざけた砂遊びも、懐かしい。学生の頃、制服のままで遊びに来ては、たくさん砂をつけて、制服をゴワゴワにして帰ったものだ。はたまた、大人になっても、ここには間違いなく毎年来ていた。海岸で遊んだあとは、濡れて、砂がついたら、乾くまで待つ。砂を、いじりながら。乾いたら、パンパンと掃って、帰ったものだ。掃ったはずの砂は、思い出のように、家までくっついてきていた。

今は、それができないことが、少し物足りなく、寂しかったりする。いつかまた、そんな体験ができる日がくるのだろうか。白い砂浜に、片寄せ波がそっと、舞い込んでくる日はくるのだろうか。また、あの景色が見たい。

誰かの、私たちの思い出の砂浜が、思い出づくりのひとつになることを、願ってやまない。

（文　一兜育恵）

Tatsutto／たつっとな人

立ちあがろうとしている人（立人）
思いを達成するために走り出している人（達人）
何かをしようと動きだし一生懸命な人（発人）
その汗が一筋の雫となり、平坦な水面に「たつっと・・」滴り、波紋広がっていく様子を思い浮かべます。
これからのまちに、「たつっと・・」希望のエッセンスが広がっていく事を期待し、本誌の名前「Tatsutto」となりました。

ひょっこりひょうたん塾は、地域の資源を活かしながら芸術文化等を通じた地域づくりを担う人材育成を進めていきます。今年度は、大槌の若者を通し「まち」の様々な魅力とその力を活かしていく取り組みを紹介していきます。

事務局　元持幸子

※「たつっと」＝大槌の方言　水滴を一滴垂らす　滴り落ちる様子を表す擬音語

ひょっこりひょうたん塾通信
発行日 2014年8月18日
発行　ひょっこりひょうたん島プロジェクト実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団、特定非営利活動法人いわて連携復興センター
webサイトでも、通信が見られます。
HP　http://www.hyotanjuku.jp/
FB　https://www.facebook.com/hyoutanjyuku
E-mail　hyotanjuku@gmail.com

取材編集　合同会社ＯｆｆｉｃｅＲ／撮影　Hana Ozawa　印刷　じゃじゃ工房